

タイと日本をつなぐ「子ども」と「音楽」と「なんじゃこりゃ」

小島 剛

(一般社団法人タチョナ代表・大阪音楽大学特任准教授)

1) 自己紹介

- 音楽： バンジョー (売れないロックバンド≠おやじバンド)
ドラム (地域市民とジャズビッグバンド)、
コンピュータ (即興音楽、海外のアーティストと共演多数)
ソーシャル・ミュージック、サウンドアートの企画
- 一般社団法人タチョナ：子どものアートワークショップの企画、コーディネーター
学校プログラム : 文化芸術による子どもの育成事業 (文化庁)
(芸術家派遣事業、コミュニケーション能力向上事業) ほか
地域アートプログラム：エノコでの活動 (オヤトコエノコ)、ご近所映画クラブ、
庄内つくるオンガク祭 (貧困&社会課題に関わる活動)
- 大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻
音楽に関する企画やマネジメントを行うコース
社会課題や地域の問題と音楽をつなげるイベントづくり
在日外国人のためのラップワークショップ、子ども(の)食堂 (創造の場作り)

2) 「なんだこれ?ワークショップ」経緯

2014年2-4月 enoco (大阪府立江之子島文化芸術創造センター)にて実施。

- ・ 都会に住む子どもを対象にした「アート」ワークショップ。
 - 自動販売機でモノを売ってみる。作品と価値と関係性のWS
 - 親と子どもの役割分担によるワークショップ(体操、音楽、分身人形)
 - デザインWS、アニメーションなど学校向けプログラムのパイロットケース
- ・ 編集者(旧:現代美術作家)の岩渕拓郎さんと協働開発。

「何かわからないものをカテゴライズしたり、名付けてみることでアートに見えるのか?」

発想の方法を教科書として作成。それに基づいたパフォーマンスアート作品の制作
- ・ 部室を作って、子どもが自由に来れる環境の中、様々なアイデアを生み出す。
→放課後遊びにくる。

2017年2月 バンコク (サンブレイン)

- ・ タイのD-jung ネットワークより日本のワークショップを教えてほしいという依頼。
- ・ 野村誠氏のWS、若手アーティストとマネジメントのチーム、
→普通のプログラムよりとんがったものを

2019年2月 ウッタラディット (キン・カーン・バイ)

- ・ 国際交流基金市民活動助成による実施。
- ・ 評判が良かったため、タイ国内の他地域での実施

2019年8月～ enoco の学校子どもアート学科 (思考実験コース)

3) タイでの活動「プーンティニー・ディーチャン〜この場所、いいね!〜」

- ・2010年青少年を対象としたコミュニティアートプロジェクトがスタート
背景：青少年のメディア依存による社会的孤立と地域コミュニティ力の低下
助成：タイ健康促進財団、青少年メディア機関（政府系機関）
→タイ国内40地域のコミュニティアート団体がネットワーク化し、
活動団体間の交流を図る。
- ・学校教育（義務教育9年+3年の無償教育）
→多様化、国際化→ホームスクール、インターナショナルスクールが盛ん

2017年2月 バンコク（サンプレーン）

- ・タチョナでも先進的なワークショップをどのように受け止めるか実験的に実施。
- ・歴史的な地域→再開発 中高校生による地域ガイド
- ・17名の子ども（小学生から高校生までが参加）

2019年2月 ウッタラディット（キン・カーン・バイ）

- ・農業が主力産業のタイ北部小都市。地域アイデンティティが希薄。貧しい。
→農業体験、演劇によるコミュニティアート、学校での演劇の授業
- ・ウッタラディット HUB 2U（アート、子ども、シェアリング）
（アートワークショップ、演劇WS、農業体験、乗馬セラピー、カフェ、古本屋と
図書館）
→HAPS、ココルームがモデル
- ・D-jung が協力、演劇的手法によるファシリテーション
- ・ホームスクール出身の子どもが多く参加。

4) 「なんだこれ？」と「これがいい」

- ・パフォーマンスアート作品
- ・考える→やってみる→撮る→見る→考える (思考と創意工夫と客観的視点)
- ・自分なりの評価 (表現? 生き方?)
- ・暮らしの大きな違はない。

日本、ゲーム、アニメ、フットボール、母親への反発、(→教師への反発が少ない?)

- ・内容についての変化 →弱者を傷つけるような表現はしない。

5) まとめ

- ・トランスローカル・アプリケーション ≠ インターローカル、グローバル
ローカル間を境界、国境を超えてフローティングするアプリケーション。

→ネットワーク化された複数の地域が人的交流からつながり、コンテンツに境界を越えさせていく。